

英語教師の自主的な学びと成長の度合いを判断する 授業実施行動チェック項目の開発

—英語授業における教師の意思決定能力に関する達成基準の提案—

The Check List for Novice English Teachers' Behavior in Their English Classes and the List's Explanation of Why These Check Items Were Set up for Its Useful Uses

古家 貴雄*

FURUYA Takao

要旨：本稿は、古家（2014）の続編である。中部地区英語教育学会の課題研究プロジェクトである「英語教師の成長につながる支援」の研究の一環を成すものである。特に初心期の教師を取り上げ、彼らが模擬授業を行う際にその支援ツールとなる授業での行動チェック項目表を作成し、その提案を試みている。チェック項目表の前提として、教師の授業に関する意思決定能力について論じられ、またこの表の活用方法についても言及されている。なお、具体的な行動チェック表は、①模擬授業におけるチェック項目と②模擬授業に関する意思決定項目が含まれている。今後は、こうして作成された授業での行動チェック項目が、学生の授業の良し悪しに関する判断基準の育成に寄与するかどうかを検証されるべきであるが、残念ながら、本論考ではそのレベルまでは到達していない。あくまで、研究スケッチの段階である。

キーワード：教師の成長、模擬授業、授業力、意思決定能力

I はじめに

本論考は、古家（2014）の続編である。中部地区英語教育学会による3年間課題研究プロジェクトとして認められた研究テーマ「英語教師の成長につながる支援」の研究の一環を成すものである。前稿でも述べた通り、本研究課題プロジェクトの目的は、「現在、英語教師を取り巻く教育環境には多様な問題が存在していて、教えられた知識と技術だけではそれぞれの教育現場での対応が困難になりつつあるのが現状で、そのため、英語教師の成長を促す支援の在り方を見出す必要があるということ」であり、この研究の前提として、「英語教師は、技能や能力において生涯に亘って発達し、また、それぞれの段階において様々な質の異なる困難に遭遇し、各個人がそのそれぞれに苦しみながら対応している。よって、英語教師に対し支援の在り方を考えようとする場合、当然、その発達段階によって、支援の種類と方法が異なるであろう」というものがある。

この研究的前提を基に、プロジェクトが出発したわけだが、2年目から最終年度に向けての研究の方向性として、各研究メンバーが英語教師の成長に有効だと考える支援方法を実践し、その成果をまとめていくという流れが決定された。ただし、ここでいう「支援」とは、外から一方的与えられるという意味ではなく、自己支援つまり自己の置かれた状況と成長段階に気づき、更なる成長に何が必要なのかを気づく手立てやツールなど提供することを意味していた。

そこで、筆者はこのプロジェクトの中で、「教師の授業力の向上」をキーワードにして、自分の

* 教育人間科学域 教育学系

教師としての力量が伸びた、あるいは向上したと実感できる、あるいは確信できる「行動（達成）チェック（評価）項目」表の提案を思い付き、それを研究として進めることにした。こうした授業に関する行動チェック項目表の提案こそが成長する教師に対する「支援」の有効な方法であり、筆者は特に、英語の教員養成段階の初心期の英語教師に向けて「行動（達成）チェック（評価）項目」表を提案することにした。そして、具体的に、授業力向上の行動・達成チェック（評価）項目としてターゲットになるのは、教師の意思決定能力である、と想定し、具体的提案となる授業における「行動（達成）チェック（評価）項目」表が、英語教員養成の学生の模擬授業に関する実施の際の能力向上のための「支援」ツールとなると考え、こうした項目の作成と提案が意義ある研究に十分になると考えた。本論考はそうした意図に基づく報告である。

本論考は以上を踏まえて、大よそ、次のような段階を踏んで論じてゆく。まず、本プロジェクトの主旨が、教師の成長段階を考慮しての支援ということを目指しているので、①「教師の成長」をどう考えるか、という点から出発し、次に、②なぜ、教師の意思決定能力の向上をターゲットにするのか、に移り、そして③「行動（達成）チェック（評価）項目」表はどのような背景から生み出されたものか、を押さえながら、④実際の「行動（達成）チェック（評価）項目」表の提案に進み、補足として、⑤模擬授業のチェック項目と意思決定項目との関係、に触れ、最後に、⑥結語と今後の課題で本稿を閉めることにしたい。

II 「教師の成長」をどう考えるか

先から述べているように、教師の成長に資する「支援」、それを行動評価項目表の提案によって行なおうとするのが、本論考の目的であり、骨子である。であるとすると、当然、教師が成長するとは何を意味するかをある程度はつきりさせておかないとならない。だが、古家(2014)では、この教師の成長というものは、決して、直線的に教師の就任年数、あるいはキャリアによって段階的に時期を区切って発達するものではなく、あくまで個人的に多様なプロセスがあり、一概に、その発達段階を明確には示せない、というのがその結論であった。ただ、教師の発達段階については、諸説があり、例えば、Berliner(1988)や吉崎(1997)など、一般的な教師の発達の研究においては、教師の発達の基準として、①教室事象の把握が無意識的にできるようになるかどうか、②教室行動が流暢で、柔軟で、しかも自動的になるかどうか、③教室事象の予測が正確にできるようになるかどうか、が主張されている。また一方で、英語教師については、JACE T教育問題研究会の提案した特に中堅教師の資質能力基準化の項目があり、それが教師の発達の参考になる(JACE T教育問題研究会, 2008:46-55)。それは例えば、中堅教員の授業力基準と多くが考えている項目とされ、以下の通りである。

- ・生徒のニーズを分析し、授業計画に役立てることができる
- ・学習者に応じて適切に教材を選定したり、補助教材を作成できる
- ・授業全体を客観的に評価し、改善できる
- ・学習者の英語学習に対する動機づけを喚起し、維持するのに有効な方法（ストラテジー）について知識があり、実践することができる
- ・学習者が教室外でも自主的に学ぶために手助けできる方法を知っており、自律性を促進することができる

ここでは、初任者は、授業に関する基本的な構成を、ねらいを持って形成できることが重要とされ、また中堅教員については、個々のレベルの生徒の状況に応じた指導ができることが重要とされていた。いずれにせよ、特に本稿の研究対象である初任者については、授業の基本的手続きやクラ

スマネジメントに課題があることが明らかになっているということで、例えば、教師の成長とは、①授業の計画から実施まで、授業の目的や目標を軸として、首尾一貫した構成を考えることが出来ること（授業に関するマクロな視点）、②授業構成に関して、目の前の学習者の状況に合わせた形にすることが出来ること、③授業中の突発的な出来事に対応でき、また、生徒の状況に合わせて臨機応変な授業過程の対応が出来ること、などが考えられる。

Ⅲ なぜ、教師の意思決定能力の向上をターゲットにするのか

本論考では、学部の英語教員養成に関し、学生の模擬授業における計画段階、実施段階、実施した授業の反省段階で、どのような事項を意思決定すべきかを考えさせながら、指導案の作成を行わせる際の考慮点を列挙したリストを提示することが目的の1つとなるわけであるが、なぜ、教師の意思決定能力の向上が授業力の向上において重要になるのか、その理由について考えてみたい。その理由として考えられるのは、次の2点である。①これまでの経験として、現場の優れた教員の特徴として、自分行った授業の内容や方法について、それぞれを選んだ選択の根拠や理由をはっきりと述べる事ができるということがあり、それを一言で言えば、自分の行為に関する意思決定の基準を明らかにできることだと言って良い。つまり、彼らは遍く教師として優れた意思決定能力を持っていると言って良いと思うからである。②また、教育あるいは狭い意味での教授という行為は、各場面での複数の選択肢からの選択のプロセスであり、あらゆる場面で必ず意思決定が関わってくるからである。

そして、教師の意思決定能力については様々な定義があると思われるが、筆者は次のように規定した。それは、

「種々の指導の内容や方法の選択肢の中から、ある情報（生徒の英語レベルや英語に対するニーズなど）を基に、自己の英語授業の方針を決定でき、しかも選択の根拠や理由を説明できる能力」である。

この定義については、Freeman (1989) や Richards and Rockhart (1994) の考えがその下敷きになっている。例えば、Richards and Rockhart (1994) は、英語教師における意思決定の種類と内容について、①計画意思決定と②相互作用的意思決定と③評価的意思決定の3種類であるとしている。①の計画意思決定とは、教育の全体計画、単元、個々の単位を関連させて授業を総合的に捉えて考え、授業の方針を決定することである。②の相互作用的意思決定とは、授業という特殊なダイナミクスのある状況の中で、その場に合った適切な意思決定を下すことである。例えば、生徒の授業内の活動や振る舞いに関する意思決定などはこれに含まれる。③の評価的意思決定とは、終わった授業の反省と次の授業への改善のためのプロセスを指す。

Ⅳ 「行動（達成）チェック（評価）項目」表はどのような背景から生み出されたものか

数年前から筆者は、「英語授業研究」という授業を担当している。この授業は、学部の2年生を対象にして、次の年に中学校で「英語」の教育実習を行う際に現場できちんと授業計画とその実施ができるような能力を養成することが目的である。この授業では、最終的には、授業の計画・実施・評価の3つの面に関する意思決定能力の育成を目的としている。具体的には、授業に関わる意思決定の種類、授業分析、授業案の作成、指導テクニックの習得、授業参観などがその内容になるが、授業の最終段階として、模擬授業の実施ということがある。

実際の模擬授業の計画と実施を学生に行わせる際には様々な障害や問題が起こる。数年、同じ試みを学生にさせていると、特に授業と実施でのその困難点や問題点について、共通のパターンが現われる。

そして、模擬授業の実施直後とこの授業自体が終了後に、その担当学生や受講生全員に授業計画、あるいは、授業実施の問題点・困難点をインタビューしたり、「模擬授業を行っての感想」を提出させているが、それらに基づいて、模擬授業のチェック項目、あるいは模擬授業の意思決定項目という「行動・達成チェック（評価）項目」を作成した。

なお、古家（2006：260-261）では、実際の授業の中で学生達が模擬授業を計画し、実施する中で遭遇した問題点・困難点の代表的な事項をまとめており、実際の授業の中でどのようなアドバイスや指導がそれらの困難点に関して remedy として行われたのか、挙げてみたい。

困難点として挙げられたのは大きく次の3点である。①生徒の授業までの英語の知識のレベルを想定し、指導内容をどの程度のレベルにすべきかがよくわからない。②授業の内容を盛り込みすぎて、時間内に授業を終えられない。③コミュニケーション活動について、活動の手順の指示や説明がうまくいかない。

①の remedy は、「授業の前提」という項目を指導案の中に入れさせる、であった。具体的には、この授業までに生徒は、目標となる文法項目についてどの程度わかっているのか（この授業の前までどこまで指導されているのか）、あるいは今日初めて学ぶのか、また、教科書の予習は事前に要求されて入る状態なのか、さらには、語彙はこの程度までわかっているとか、この授業までの生徒のレベルを種々授業者に想定させ、それを指導案の中に明示させ、それをフロアの生徒役の学生に理解させた上で実際の模擬授業に入らせた。②の問題については、授業をなるべくすっきりした内容にするよう指示した。具体的は、内容的に切れるところはなるべく切る（授業内容をできるだけ吟味する）。最初考えた内容の3分の2程度の量を目安にするように指導。説明の部分はなるべく減らすことも指導した。特に文法の導入のところの内容をなるべく簡潔にするように remedy として伝えた。③については remedy として、以下のような「活動の指示について（ゲーム・活動の成否はこれによって半分以上は左右される）」というプリントを作って学生に配布した。記載された項目は以下の通りである。

- ・情報の生徒全員の共有が大切：活動に関する情報は、クラス全員が完全に把握していること（そのための心配りを忘れない）
- ・指示に必要な情報（盛り込むべき情報：例えばゲームなど）
 1. 活動の目的（例：このゲームによって、相手の好みを知ってもらいたい／未来形のある文脈で使えるようになってもらいたい）
 2. 活動の手順
 3. 活動の組織（例：グループ、あるいはペアを作ってください）
 4. 活動上の注意点（例：活動シートは相手に見せてはいけない）
 5. 活動の時間（例：持ち時間は5分／場合によっては、持ち時間を敢えて示さないケースもある）
 6. 活動の最終目標（例：自分と好みの合った3人を見つけたところで終了する）
- ・指示が徹底していないと判断した場合には、活動の途中で止めさせる（徹底しているかどうかの確認は机間巡視で行う）
- ・活動で使うべき表現の確認や単語の意味の確認、さらには、使う表現／構文の練習は活動の前に十分やっておく。
- ・わかりやすい指示の条件は、誰が、何を、どのように、結局どのようになるまで、やるかがはっきりしている指示、である。

V 実際の「行動（達成）チェック（評価）項目」表

さて、では実際に授業の中で、学生に模擬授業を行わせる際に提示する行動チェック項目リストを提案してみたい。何回も述べているように、これらの項目は、「英語授業研究」という授業の中で再三学生に模擬授業を行わせた中で抽出されてきたものである。

まず、教師の成長に資する「行動（達成）チェック（評価）項目」表は、具体的には、次の2つの大きな項目が含まれる。

①模擬授業におけるチェック項目と②模擬授業に関する意思決定項目である。①模擬授業におけるチェック項目については、主に3つの局面があり、それは、計面前、実施中、実施後である。②模擬授業に関する意思決定項目については、やはり3つの局面で、授業前、授業中、そして、授業後である。

なお、以下の項目はあくまで目安である。授業の形態は基本的に無尽蔵なものであるから、チェック項目を生み出そうと思えば、これもまた無限に生みだし得るだろう。

では、①模擬授業におけるチェック項目から以下に提示する。

■大学生の模擬授業におけるチェック項目（計面前、実施中、実施後）

◎授業計画の段階でのチェック項目

1. 学習者の英語の能力、レベルはどの程度かが把握できているか
2. 学習者の既習事項は何か、あるいは既習の題材は何か、または、教科書全体の構成、つまり、どこで何が教えられているのかを把握できているか
3. 授業の構成にはどのようなものがあり、どれを選択するのが相応しいかの目処はついているか
4. 扱う単元の流れや構成をどうすべきか。そのために年間指導計画の中で該当の単元はどのような位置づけにあるかを把握できているか
5. 目標となる文法型式や技能はどのようなものか決めているか
6. 授業の目標を何にすべきかが把握できているか
7. 6をどのような指導方法で達成すべきであるかのアイディアは持っているか
8. どのような技能や種類の活動を授業内に入れるかは考えてあるか
9. 本時の授業で何を達成させるべきかが具体的にイメージできているか
10. プリントの枚数はきちんと生徒の人数分、準備されているか
11. 教材研究や教科書の分析は十分行われているか

◎授業実施の段階でのチェック項目

◆授業全体についてのチェック項目

1. 授業がスムーズに流れているか。いないとすればどこが問題か把握できているか
2. 授業の各フェイズ（局面）の区切りができていて、生徒にもその区切りが明言されているか、つまり、指導の手順が生徒にとって明確か
3. 今日勉強することと今日勉強したことが授業中、何度か明言されているか（特に授業の最初と最後で）
4. 知識詰め込み型の授業になっていないか（生徒が消化不良を起こしていないか）
5. 4技能のバランスが取れた授業の内容構成になっているか。読みだけだとか、技能的アンバランスはないか

6. 授業中に提示される生徒への情報が全体で共有されているか
7. 間違いを犯しても大丈夫なような雰囲気作りはできているか
8. 時間配分には問題はなかったか
9. 今、生徒が何をしているべきか、すべきかの指示は絶えずあったか
10. 教室英語は適切な場面で、生徒のレベルに合ったものが使われていたか
11. 教師の声は大きく、明瞭であったか
12. 本時の授業の目標は達成されているか
13. 授業中、進度が早い生徒、あるいは遅い生徒に何らかの対応ができているか

◆授業の個々のフェイズ（局面）について

1. 最初の挨拶と個人の生徒とのやり取りが本気のコミュニケーションになっているか
(How are you?, Fine, thank you. の機械的なやり取りになっていないか)
2. 文法や教科書の内容の導入は、興味を湧かせ、背景知識を活性化させるようなものになっているか
3. 教師の会話による導入は、1度だけでなく、複数回行われているか
4. 導入でリスニングをさせる場合、聴く目的や構えを従前に提示できているか
5. 発問をするときに、答えさせるのに必要な情報や練習をしているか
6. 発問のとき、1人を指名して、その者だけに質問を与えていないか
(適切な間を取ってから指名するべき)
7. 生徒が答えを間違えたときに、フォローはきちんとしているか
8. 音読指導は理解の後、されているか
9. 音読練習は、個人と集団、両方とも行われているか
10. 活動に対する指示は明確か
11. 活動の目標は明らかになっているか
12. 活動に必要な使用表現の事前練習は十分できているか
13. 配布プリントは見やすいか
14. 単語の提示は、なるべく文脈を使ってやっているか
15. 文法指導のとき、学習する文法がどのような場面で使われるか、学習の動機を与えているか
16. ペアやグループ作りはスムーズであったか
17. 活動の指示は複雑ではなかったか、また指示の理解は確認されたか
18. 活動プリントはわかりやすいものであったか
19. 教える内容が基礎を踏まえて、応用に進む形式を取っていたか
20. 板書の内容は分かりやすかったか
21. ドリルや練習の時間は十分取られていたか
22. 教師は授業中きちんと机間巡視をして、生徒の状況を把握する努力をしていたか
23. 活動に対するフィードバックはきちんとして行われていたか
24. 授業の内容に消化不良があると感じ、授業のペースを変えていたか
25. 活動や作業が早く終わった生徒への対応はできているか
26. 生徒の指名に偏りはないか
27. できるだけ生徒の発言を引き出そうという努力はしているか
28. 黒板の方ばかり向いていないで、生徒の反応や表情をきちんと把握しているか
29. 話し方はゆっくりで聞きやすいか

30. 絵などの掲示の状態は適切か
31. 説明が難しくなっていないか（特に文法などの場合）
32. 生徒が説明がわかっているか、そうでないか、きちんと確認しているか
33. わかりにくい文法用語とか使っていないか
34. その授業での学びの内容がはっきり生徒に意識させられたか

◎授業実施後の段階でのチェック項目

1. 本時の授業の目標は達成されていたか
2. 達成された部分とそうでない部分はどこで、その理由はなにか
(授業計画に問題があったのか、あるいは授業技術に問題があったのか)
3. 知識の定着を促す活動や練習は十分であったか
4. 授業中の英語の使用は十分であったか
5. 授業中の生徒の誤りへの対処は適切であったか
6. 時間配分は適切であったか。計画と異なったのはどこで、その理由は何か
7. 授業での知識の提供は、生徒への消化不良を起こさなかったか
8. 準備不足の部分はどこかなかったか

では、次に、②模擬授業に関する意思決定項目について提示する。

■模擬授業に関する意思決定項目

◎授業前

1. 模擬授業の教材のどこを選ぶか
2. 授業目標は何にするか。知識的な目標、技能的な目標は何にするか
3. 目標達成のために、どのような指導内容と方法、活動を準備するか
4. 目標達成のために、教材をどのように扱うか
5. 授業構成をどうするか
6. 板書計画をどうするか
7. 授業中使う英語や掲示物、視聴覚機器、活動、シートについてどのようなものを選ぶか
8. 技能のバランスはどう取るか
9. 活動での指示はどのようにするか
10. 時間配分はどうするか。何をどういう配列で授業を組み立てるか
11. 教授項目の定着や活動の準備段階としての練習をどの程度用意するか
12. グループやペア活動などの指導形態はどうか
13. 音読のバリエーションはどうか
14. 導入はどのように行うか（文法や本文の内容について）
15. 単語（新出）の提示はどのように行うか
16. 授業のまとめはどうか
17. 授業内の生徒の困難点（作業上、パフォーマンス上）はどこで、それにどう対処すべきか
18. 質問や発問はどれにし、どの程度の達成率で良しとするか

◎授業中

1. 授業の展開は計画通りかどうかでないか。そうでないとするそのまま進むか、それとも修正するか、省くか
2. 活動を推進するのに、準備練習はこれで十分か、それとももっと必要か
3. 導入はうまくいっているか、それとも不十分か
4. 活動上、その他の指示は適切か、さらに説明が必要か
5. 活動はうまくいっているか、途中で止める必要があるか
6. 音読練習などの練習について生徒それぞれに目標を持たせるべきか、あるいは持たせているか
7. 説明の追加が必要か、必要でないか
8. 掲示や指示は全員が理解できているか、さらなる説明が必要か
9. グループ活動でうまくいっていない生徒がいるか、その場合、どのように支援したら良いか
10. 授業での活動に対して遅れ気味の生徒はいないか、その生徒に対してどのようにフォローをいれるべきか
11. 理解度や達成度を確かめるための生徒への指名はこの程度で良いか、さらに多くの生徒に聞いて、確認を確実にすべきか

◎授業後

1. 本時の予定はすべて終了したか
2. 定着や理解において不十分な項目、次の時間で補足する項目はあるか
3. 今日の教授内容について個人的に対応が必要な生徒はいたか
4. 授業中の生徒への質問への対処は十分できていたか、足りないことはなかったか
5. 目標達成への検証はできたか、それへのさらなる対応は必要か

VI 模擬授業のチェック項目と意思決定項目との関係

以上に提案した2つの「行動（達成）チェック（評価）項目」表は、生徒の模擬授業を効率よく行わせるためのチェック項目と意思決定項目であったが、実際にこの項目リストをどのように使って学生に模擬授業を計画させるかについて述べる。

実際には、この2つの項目評価を2段階で行わせる。まず、「模擬授業のチェック項目」によって、①授業を具体的に考えさせる中で、チェック項目に沿って、考える必要があることを意識させる、その上で、「意思決定項目」によって、②実際に指導案を書きながら、授業の計画や実施において決定しなければならない事項として押さえるべきところをチェックさせるのである。あるいは、逆に、まずは、授業計画と実施、さらには反省時にどのような意思決定項目があるかを「意思決定項目」によって意識させながら、授業の計画を立てさせ、次にどのように授業を行動として展開させていくか、それを「模擬授業のチェック項目」で確認させながら、実際の授業での考慮点を考えさせるというのも指導方法として有効だと思われる。

それから、教師の成長と言う意味では、これらの項目によって、成長の度合いを測るというよりも、これらをチェックさせることで、授業構成上の注意点や考慮点を意識させ、その結果、このようなチェックが自発的に実習等でできるようになれば、それはそのまま教師の成長を保障する、ということになると思う。

VII. 結語と今後の課題

結局は、教員養成段階の教師（の卵）の成長について重要なことは、自分の授業が良い授業かそうでないかの判断基準を作れるかどうか、にかかっていると思われる。そのためには判断基準をこちらから示し、それを視点として、自分の授業を見つめさせ、分析できるようにさせないとならない。

実は、この工程は非常に難しい教育乃至はトレーニングとは当然なるはずだが、私の実践からは決して不可能ではないと証言できる。基本的に教師という職業は on the job training ではあると思うが、養成段階で出来ることも十分あるのではないだろうか。

今後の課題としては、やはり、この「行動（達成）チェック（評価項目）」表を使って、学生の意思決定能力や授業能力の伸びを実際にデータの的に検証できることが理想なのだが、しかし、厳しい感じもする。そのための研究方法が難しいのである。

引用文献

- Berliner, D.C. (1988). Implication of studies on expertise in pedagogy for teacher and evaluation. *Proceedings of the 1988 ETS Invitational Conference*, 39-68.
- Freeman, D. (1989). Teacher training, development and decision making: A model of teaching and related strategies for language teacher education. *TESOL Quarterly*, 23 (1), 27-45.
- 古家貴雄 (2007) 「学生に英語の模擬授業を計画・実施させる際の問題点について」
ARELE : annual review of English language education in Japan 17, 253-262.
- 古家貴雄 (2014). 「英語教師の生涯発達段階と支援可能性の関係について—先行研究と研修事例から—」『山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要』No.19, pp. 57-65.
- J A C E T 教育問題研究会 (2008) 『英語教員の質的水準の向上を目指した養成・研修・評価・免許制度に関する統合的研究』（平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究（B）報告書）.
- Richards, J.C., & Rockhart, C. (1994). *Reflective Teaching in Second Language Classroom*. Cambridge U.P.
- 吉崎静夫 (1997). 『デザイナーとしての教師・アクターとしての教師』金子書房.